都市河川の遊歩側道に対する周辺住民の意識に関する一調査

大阪市立大学大学院　正会員　○角野　昇八
大阪市立大学工学部　藤木　栄治
大阪市立大学大学院　正会員　内田　敬

1. まえがき

現在，河川は治水，利水の役割を担うだけでなく，うるおいのある水辺空間や多様な生物の生息，生育環境として捉えられ，また流域住民と行政が一体となった川づくりが求められている．しかしながら，地域住民の意見をいかに集約，反映するかの方法論とともに，住民が河川整備に何を求めているのかも十分に把握できていない．

このような背景から著者らは，大阪のいくつかの河川周辺の住民に対してアンケート調査を行った．このアンケート[1]の中で城北川周辺住民は遊歩道の整備に対して90%近くの支持を与えた．河川際の遊歩道がどのような理由で好まれたのか，あるいは遊歩道に対して何をさらに求めているのか等が，明らかにする事ができれば，今後の河川整備やそこへの的確な投資を考える上で有用であろう．

そこでその指示の内容の詳細を探る目的で城北川周辺地区住民を対象として再びアンケート調査を昨年実施した．本研究では，その調査から浮かび上がった周辺住民が，遊歩道を通してもつ城北川に対するイメージに関する結果を報告するものである．

2. 城北川の概要

大阪市の東北部を流れる城北川は，都島区，旭区，城東区内にわたる全長約5.6kmの淀川水系の1級河川である．もともと城北川は運河として昭和15年12月に開削され，臨海部を除けば大阪で最後に開削された運河となった．その後，高度経済成長とともに汚濁が進み,そのため大阪市は昭和40年に浄化対策事業を起こし，その際に遊歩道も同時に整備された．昭和60年には1級河川となり翌年からは城北川改修事業が始まった．平成2年には城東区部分は完成し，現在は残った旭区，都島区で工事が行われている．また，昭和62年に「ふるさとの川モデル河川」に指定され，整備されている．

3. 調査概要

今回，アンケートを行うにあたり，その質問内容の設定や項目の整理のために，実際に遊歩道を利用している人々を対象にして，予め城東区でヒアリング調査を3回に分けて行った．ヒアリングでは，遊歩道中での好ましく思う場所や事物あるいはその逆，また遊歩道利用の理由，川に対して感じることなどを聞いた．

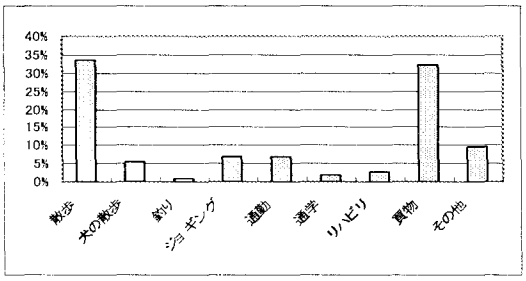
ヒアリング調査の結果から出てきた好ましいもの，好ましくないものの具体的な事物や気持ちに基づきアンケートの質問項目を作成して，城北川周辺に住んでいる住民にアンケート調査を行った．アンケートでは，利用者の属性，利用理由，利用にあたり好ましいもの好ましくないもの，川に対するイメージや遊歩道利用での要望などを聞いた．選択式の部分は複数回答で順位付けをしてもらっている．アンケートは2003年1月12,13日にポスティングによる各戸配布を行い，回収は郵送回収とした．1戸当り4通のアンケート用紙を入れている．また配布エリアは，南北は菫橋から南菫橋までの約500m,東西は川の両岸に約500mずつに居住している1175戸に配布した．表－1はアンケートの配布数並びに回収率である．

表－1　アンケートの配布数，回収率

配布数	回収世帯数	回収率	回収数
1775	350	19.72%	652

4. 調査の結果と分析

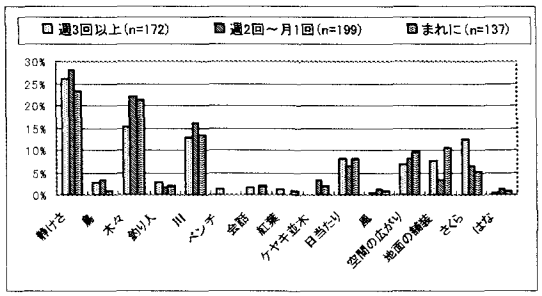
アンケート回答者の属性は，女性が若干多く（56%），年齢は20代から60代迄ほぼ一様な分布を示した．まず遊歩道の認知度を調べたところ，97%もの人が知っていた．また遊歩道の利用目的を択一式で尋ねたところ散歩，買物が両者とも35%程度で最も多かった（図－1）．散歩が多い事は，遊歩道が身近な散歩場所として親しまれていることがわかる．また買物の利用者が多いのは，女性の回答者が多かったことと，遊歩道を



図－1　遊歩道の利用目的（n=528）

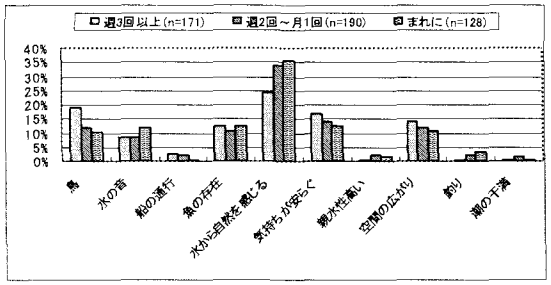
Shohati KAKUNO,Eiji FUJIKI,Takasi UCHIDA

通行路として利用している人も多い事を示している．なお，図中のｎは回答者総数であり，以下同じである．

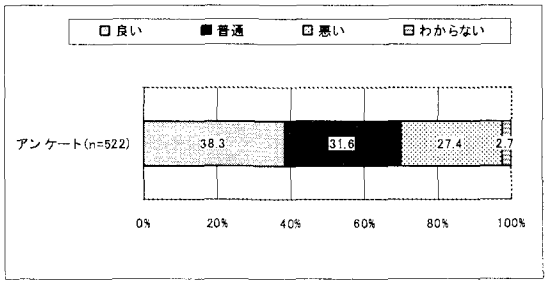


図－2　遊歩道利用に当り最も好ましいもの(n=508)

図－2は，遊歩道利用する際の好ましいものとして挙げられた項目（複数回答）を利用頻度別に示したものである．静けさ，木々，川の順序に多く，人々は川を背景とした都心の静寂さと木々の緑を求めていることがうかがわれる．なお，この傾向は居住年数別や利用目的別の集計でも同様であった．



図－3　川に関するイメージとして良いもの(n=489)

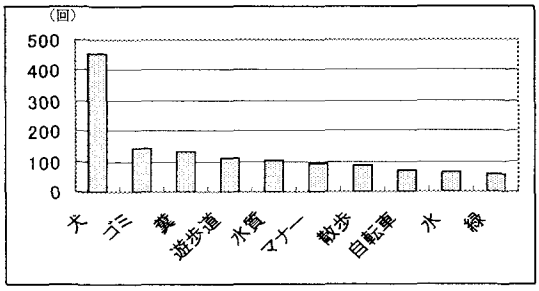


図－4　城北川のイメージの良否について（n=497）

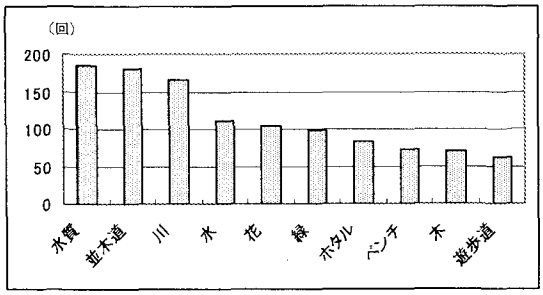
図－3には，川に対して持つイメージに関する設問への回答を利用頻度別に示した．人々は川に行くことによって，さほどきれいとは言えない水を見ていても自然を感じるとともに気持ちが安らぎ，同時にビルと高速道路の都会の中で空間の広がりを感じ取っていることがわかる．図－2の結果と併せてみるとき，人々は都心の川やあるいはその水面の存在によって心の安らぎを大いに得ていることがうかがえる．

「川の存在を意識するか？」との設問も設けたが，536の回答者のうち実に94%もの人々が「する」と回答している．ただし，これにはアンケートへの回答者はそもそも川に関心がある人からの回答が多いことかもしれないことに留意する必要があろう．

図－4は，川の存在を意識すると答えた回答者に対してそのイメージの良否を尋ねた結果である．「普通」も含めるとほぼ70%以上もの人々が良い印象を城北川に対して持っている．



図－5　城北川遊歩道に望むもの（n=652）



図－6　川のある遊歩道に望むもの（n=652）

最後に図－5は，アンケート回答者による城北川に対する自由意見の中からさまざまな名詞の出現頻度を表したものである．また図－6は，同じく自由に連想してもらった城北川以外の川に関する自由意見の中からの同様の結果である．城北川に対しては犬，ゴミ，糞などが多く，また自由連想河川では水質や並木道，花，緑などが多い．現実の目前の川に対しては，環境の良さよりもむしろマナーの向上を望んでいる一方で，理想の川の姿としてはいわゆる「良い環境」の川の姿を人々は望んでいることがうかがえる．

参考文献

1）角野・大谷：第3回河道の水理と河川環境に関するシンポ論文集，187-194，1997